

清城内外伝書部

寛永二十六年十月十日

一昨夜亥之御祝、別法大石等、湯家人
也。城之御祝、大石家、僕亦、御集、而、合、御
同、茲、向、後、御集、之、旨、也、御、僕、亦、御、集、可
右、列、之、旨、也、御、出、也、仍、今、日、法、着、御、於
管、中、充、中、之、旨、御、旨

明曆三年三月

援、田、口、御、門、下、島、札、之、旨、因、茲、右、御、門、之、旨、
出、仕、之、旨、也、右、色、人、數、也、御、出、也、

一 泖城に在連の人数之事

約三人を以て其箱持を一人

右に人数より多し其の右に勿論致し奉事候事
以内を以て其箱持を奉事

一 下馬より内之屋敷まで之に馬より少く人多し其
以て其箱持を奉事

一 所門内番候事各別奉事

以上

享和二年九月

出仕之由 泖城中に在列人数は

仰出之由

下馬より下系に橋まで在列人数は

一 侍六人或五人或四人 一 二人 一人

一 狭箱持 一人 一 系番候事一人

一 右之通に相合し多し其箱持を一人

以書付し其人数より多し其箱持を一人
通より其人数

月日

下馬橋より内之屋敷人数は

一 四指大石若得法以之而 出江府石列地或竟
多力丸へき事

右何茂孝履丸其人様業持其人但多天石
業持其人様業二つ相白事

一 秋田善政法地以法使善并之石近之善合丸
石列地或人多履丸其人様業持其人但多之
石合善持其人二相白事

一 佛与丸中性丸小細丸石列人教了相如
先條事

一 中奥丸并之石以之善合法及人出丸

石列地其人様履丸其人様業持其人但多天
之石合善持其人二相白事

一 奥之醫脚并多与之醫脚石列地其人様履丸
其人様業持其人様業持其人但多天石合
業持其人二相白事之善合之醫脚持其人
業履丸以下之石同事

一 紀伊殿水戸殿尾張殿左馬込殿右馬込殿紀伊
宰相殿水戸中將殿徳川右大臣相殿家康一
面之石列地其人様履丸其人様業持其人
多力丸へき事外法大石家康持其人様履丸

吾人斗之無く是

月日

寛文六年

是

一 或百石

石連流結者九二人

一 二百石より九百石迄

同或人九二人

一 千石より或千石迄

同或人九五人

一 二千石より四千石迄

同六人九七人

一 五千石より九千石迄

同八人九人又十人

此等數者一月之懸知切是也

右之懸知仕奉江戸中世還る者之在具
是より不足と不若の同く右世候て乃各用
不足之而、一應入之浪加付く之在也
但番取車引役人等之割不也

寛文六年七月十三日

延宝八年

陽本丸

定

一 所三家甲府版校箱等出常口通る事

一 園持大老を始に外宅殿に面し、校箒の中し
一 佛門の外中腰掛し、向ふに元洞佛門に面
し、乃ち至事

一 佛城小部屋を面し、校箒を為す事
右出仕多時分を自今以後に相与し事也

十月

西九

定

一 此之家甲府殿に供茶使に相もめたり事
一 園持大老を始に外宅 城に面し、佛に面し

佛門より内は侍を人系候長き人より不し事
但雨天に時に並持を人より通し事

一 校箒の中は切佛門より大に佛書あり、之を
出仕日小面より候所より候に用し事

一 佛城小部屋を面し、校箒を相もめ事
右出仕多時分を自今以後に相与し事也

十月

天和二年八月

是

一 六人下馬よりぬのこ名は候茶六人より中身

雨合羽免日事 向後任用之由取履き也
右通相在し下馬 日事 日事 日事 日事
中固り執りし後し也 日事 日事

貞享元年八月

一 陣城内小者中間向合羽免 日事 日事 日事
殿中祇儀之由し下大月付日付相付し

元禄十二年閏九月

下馬より下参進右列人数之定

一 日事及拾石石以上者四指し嫡子侍六人 日事 日事 日事
被箱持二人 六人日事 日事 日事 日事 日事 日事

一 臺石石以上侍或五人或四人 日事 日事 日事 日事
列以草履履五人 被箱持五人 六人日事 日事 日事
日事 日事 日事

下参より内右列人数之定

一 日事及拾石石以上者四指し嫡子侍六人

一 臺石石以上侍或五人或四人 日事 日事 日事 日事
日事 日事 日事 日事

一 草履履五人 被箱持五人 日事 日事 日事 日事
日事 日事 日事 日事

一 日事 日事 日事 日事

一 儀番隊儀地儀布衣以上 日事 日事 日事 日事
日事 日事 日事 日事 日事 日事 日事 日事

一人多天の良の堂持人

一 二子石以下の家合布衣以下江戸中奥の流

惣出の流持人 宗履九一人 棟紫持人

多天の良の堂持人

一 醫師持人 宗履九一人 棟紫持人 宗履九一人

一人多天の良の堂持人

一 佛殿小御座正一 阿比 棟紫中 江戸外下

江戸事

但法没人のつれも今迄に在事

一 江戸中流を以て良法止不列に多とい

國持よりいふも 騎馬一隊 二隊 法法

二本 九之本 小正一 江戸外 惣持人 宗履九一人

江戸事

一 九子石より八子石迄 持七人 八人

一 八子石より七子石迄 同六人 七人

一 七子石より六子石迄 同五人 六人

一 九百石より二百石迄 同二人 三人

一 臥百石 同一人 二人

一 五子石以上の様々人 是怪二人

一 三子石より一子石迄 是怪一人

一 二子石以下、水々（皇位之用）
 但番頭茶菓若同古江人、たゞ（皇位之人）
 一 燈孝長柄、金車、乃之用事
 一 階段、中、右、列、以、信、者、右、人、叔、小、准、許、小、啓、
 一 中、中、付、事、
 右、之、紙、急、發、中、右、右、之、思、神、信、之、左、風、信、目、之、
 右、中、之、紙、小、作、法、區、中、付、道、を、七、年、片、付、事、の、
 障、小、不、存、成、紙、上、中、中、付、事、
 因九月

元禄十六未年

宛前、茂、中、濱、川、通、下、馬、之、外、信、之、志、其、集、り、
 而、之、中、右、之、中、右、之、信、不、中、信、之、人、之、信、の、
 中、付、人、呈、不、信、還、茶、集、り、の、而、之、中、右、一、切、た、之、
 信、不、中、信、之、又、急、發、中、中、付、事、
 三月

宝永二酉年

一 御殿内外、右、左、之、信、之、者、人、教、者、之、定、之、信、者、
 人、之、中、右、之、信、之、信、且、風、信、目、之、信、相、見、信、
 光

陳不日之概、つは法華事

附又その後、用事相違は証在道、亦ハ
随分減少つは法華事

一 云云以下、つは法華事、
附著改芙蓉、同法、人ハ、
附著改芙蓉、同法、人ハ、

一 万石以下、つは法華事、
附著改芙蓉、同法、人ハ、

一 云云、
附著改芙蓉、同法、人ハ、

つは法華事

一 先人初、つは法華事、
附著改芙蓉、同法、人ハ、

用事

一 如法、
附著改芙蓉、同法、人ハ、

一 下、
附著改芙蓉、同法、人ハ、

一 附、
附著改芙蓉、同法、人ハ、

一 中、
附著改芙蓉、同法、人ハ、

るを以て中し口口等考は各各依て用事

但御用多し而して口口等考は各各依て用事

一 近年以来中し口口等考は各各依て用事

一 近年以来中し口口等考は各各依て用事

一 近年以来中し口口等考は各各依て用事

一 近年以来中し口口等考は各各依て用事

一 近年以来中し口口等考は各各依て用事

一 近年以来中し口口等考は各各依て用事

一 近年以来中し口口等考は各各依て用事

一 近年以来中し口口等考は各各依て用事

一 近年以来中し口口等考は各各依て用事

一 近年以来中し口口等考は各各依て用事

一 近年以来中し口口等考は各各依て用事

一 近年以来中し口口等考は各各依て用事

七月

宝永二酉年八月

一 近年以来中し口口等考は各各依て用事

一 近年以来中し口口等考は各各依て用事

一 近年以来中し口口等考は各各依て用事

一 近年以来中し口口等考は各各依て用事

宝永二酉年八月

津城の南門居之者兵士に倭兵用之旨
其名簿中に在り於此名簿より其旨
を以て之を以て其旨に

同日

是

此仕立之津城之向之旨 城之内に其旨
其旨津城之旨 下級兵士に 将軍之旨
其旨津城之旨 此旨

宝永六七年

常盤橋門 吳藤橋門 飛津橋門
教家屋橋門 日比谷門 外橋門
才藏門 田安門 清水門
雜子橋門 一橋門 神田橋門
右門門之旨是氣之旨其旨天氣能時分
信之者其旨其旨其旨其旨其旨

六月

同年

近年此旨之旨 信之者其旨其旨其旨其旨其旨

三月 相國口白後任用之

三月

家承七宮奉二月

一 百且日法之者 所城已望寺世中

宗前也 仰知之矣 以日格 成所相

後之者相船 之望寺世日任用之

白之相進也 大月身中 加加多日

久世大和号下

正徳元卯年七月

一 信了之矣 所由所門自天氣能時

為世以後任用之 正徳元年

仰出也 又以日望加少也 相見

以方月所令 仰之 正徳元年

同記年年四月

所城已望加少也 仰常整格所門

所門所格所門 仰常整格所門

外格田所門 仰常整格所門

雜子格所門 仰常整格所門

信之者 仰常整格所門

在町人 仰常整格所門

之旨に別外、以て

四月

享保二四年

一 下馬より下馬橋迄、別人数元禄十二卯年

同九月、在細し奥書

御城内外、在色口、信守、未、後、先、年、は

御書、近、年、櫻、成、名、元、禄、十、二、卯、年、は

信守、在、色、河、相、与、下、馬、橋、付、以、て

四月

享保二四年

先、觀、徳、大、名、宅、城、名、以、法、各、園、中、安、成、屋、と

刀、持、より、以、法、之、家、方、法、違、枝、越、名、亦、知、り、と

又、以、亦、七、之、之、而、刀、持、以、及、以、亦、七、年、之、が、

而、刀、持、七、櫻、名、成、り、付、向、後、以、書、付、く、在、り

相、定、り、其、方、に、於、て、之、名、は

一 切、石、之、之、之、之、之、刀、持、七、之、之、之、之、場、不、せ、と、く

之、之、之、之、之、之、成、り、自、今、以、後、之、切、石、之、之、

上、り、以、之、七、之、用、り

右、表、白、以、京、以、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、

平因分大目付下山傳令海に但子あり也
以事しとて乃任用分中伝之

御玄園出表公家下口持分り分

- 松平加賀守
- 松平肥後守
- 松平浪速守
- 松平美濃守
- 松平越後守
- 松平出雲守
- 松平信濃守
- 松平右衛門督
- 松平日向守
- 松平大守殿
- 松平揚屋守
- 松平大原守
- 松平古京

右ノ角ノ家来大目付宛下呼号守とせり
中旨大目付ハ山城守書付流し

享保二戌年

是元

御城内外正延口伝景之成近条櫻海守
元禄十三卯年 止 作出通下此相与り分
相解り事い満之御座さ侍不し之し
お見へは取再仕相解り分以以流傳之
お力く一人別小取座下て七了之し余源
皆之と事与り以之

六月
右ノ通リノ相弱也

享保二庚午六月

高松に月日 仰告 御城内に列人取

出解書 近日付 下札 相弱也

下札 四指大石と石造口迄 敵玉持ノ端 在ノ相弱也

下札 此ノ事

下札 下乃何ノ在

下札 二石以下ノ法 莫知也 奉命 御城中 侍人

石造口極ニ相弱也 亦人 在石造口 相弱也

下札 此ノ事

下札 奉命 二石以下ノ法 莫知也 奉命 御城中 侍人

下札 新日代大坂御城代也 城ノ長 榎葉也 奉命

下札 下江州 奉命 御城代也 奉命 御城中 侍人

下札 榎葉新日代也 御城代也 奉命 御城中 侍人

御城代 榎葉也 奉命 御城中 侍人

御用ノ書也 榎葉也 奉命 御城中 侍人

下札 此ノ事

下札 此ノ事

右付札通事候

月日

^{下付札}布衣心之匠役人中又子様田より下寄返し内
金物附いたし得之人在色中成振相取中
向ししよりい六人上座朱成志、以右以終右座
小くして終ふと事候
下金物と付取人上座に取らる

享保六年十月

進取

一 今夜下馬札前より下寄返し遠捨同解下り

如江常日右下馬札前より下馬陸常
馬在相残下り以东より常不費酒井
河波也過る常通り下馬札見取し小く
右通り相心候

但常日陸常馬下腰掛し月八金日後不
若し通り言陸馬在、下馬取り下り候は候

一 陸常存取下馬札立言常日右下馬所より
陸常馬在り相残に腰掛し入金候候同前事

内様田

一 今夜下馬札南東より沙捨言陸下り常所相取

以爲是日在右之方下之陸軍馬大隊在
下事

一 來日より下馬札相立申

享保六五年十月

追手

一 出仕日、右腰掛茶を番長より下流士未沙
河橋より退か、而して河橋場付所を
此へ退か番流士を五下事

但流士等、番長整橋より退か、而して

腰掛茶、右内より番長より下流士未沙
五下事

内橋田

一 出仕日、右内橋田より番長より退か、而して流士未沙
供所、右内橋田より番長より退か、而して五下事

但馬場、先和田倉より番長より退か、而して番
付所、右内橋田より番長より退か、而して五下事

享保十六年十月

別紙より相觸、大下より番長酒井刑部

辰海角過者迄下り大正様を賜ましく
様田之方ハ九様田沙門より松平長菊屋安
角之過者中より之方笠かきり不中ハ新番
下中付を以て別紙之紙西九古目付
之之互也

十月

而天為之官信者笠かきり後之為
前之相連ハ場下之笠かきり後向後捕
自今ト大正内様田為凡大正之亦下馬
為天方子之官信者笠かきり後之為

云用也

十月

享保十七年三月

御城内外右之儀ハ信也ハ信保之儀ハ用
以是許沙抄書ハ御料ハ凡儀目之不中
作法宜中付道之儀ハ不中付
不中付ハ不中付ハ不中付ハ不中付
之之也相関ハ付中

十二月

右之儀ハ相觸ル

元文五申年五月

所城内外石身ハ依テ後者トナリ相觸ル
以テ堅ク相觸ル趣体ハ凡依目ニテ常格ハ
作法能ク付テ途中後方ハ所付通テ際
石ハ成程ハ深クシテ付テ別ニ近來様
相因依トカキテ成ル事ハ申レバ石身ハ是
所曲輪ノ内ニテ代リテ石身ハ依テ所用小
二石波ハ所付曲輪ニテ代リテ石身ハ依テ

了

右之儀ハ相觸ル

六月

元文五申年八月

石身ハ白月次涉礼日其介

所中凡ハ石身ハ依テ上リ西凡ハ石身ハ依テ
横田下馬込合ハ石身ハ依テ向後凡ハ石身ハ依テ
下全内ハ石身ハ依テ相觸ル外依テ石身ハ依テ
西凡ハ石身ハ依テ相觸ル外依テ石身ハ依テ

伊藤守屋安為一相早一重下中一休
和田倉一重一退か一分内振田下馬三休
つと片五重一勿漏為凡一出仕分一分及牛休
右身取合度依れ終終甚也御安歌之休
与人一内一つと取合
右一重一の休也

八月

寛保元酉年八月

御時任 御兼任

- 一 一里以上可石以上者下条内日付証人系履五人
而天より取置持人古進下中
- 一 一石以下下条より内付証人系履五五人而天
より取置持せ下中
- 一 一石以上以下者杖籠下条腰を前、沙金内
一切入中石安

但取取取一内一杖籠内下入中一休

右

將軍 宣下一石以上者内付証人系履五五人而天
書面一重相心取大日付内日付より向一重取

了作後家書付呈

八月

佐藤甚目御

